

碧水会 歴代の講演会一覧

年度	講師名(所属・肩書き)	演 題	会 場	担当
8年度	小田 晋(教授)	「世紀末日本の精神病理」	両国中学校	清和会
9年度	市川 正(東京都教育委員会教育長)	「学校教育の今日的課題」	上野小学校	一水会
10年度	高橋史郎(明星大学教授)	「今、求められる感性・心の教育」	早稲田小学校	一水会
11年度	池上 彰(NHK週間子どもニュースキャスター)	「今日の学校教育について」	四谷第一中学校	清和会
12年度	古賀正一(株)東芝取締役副社長	「21世紀に向けての不易と流行」	阿佐ヶ谷中学校	清和会
13年度	米長邦雄(東京都教育委員)	「東京の教育に関する願いと期待」	早稲田小学校	一水会
14年度	同 上	「幸せになる教育」	中野神明小学校	一水会
15年度	塚原光男(オリンピック体操金メダリスト)	「果てしない挑戦」	女子栄養大学	清和会
16年度	松山英幸(都教育委員会総務部総務課長)	「東京都の学校教育の今日的課題」	女子栄養大学	清和会
17年度	石井昌浩(東京造形大学講師・前国立市教育長)	「これでいいのか！日本の教育」 (10周年記念講演会)	鶴巻小学校	一水会
18年度	岡崎久彦(元タイ大使・外交評論家)	「日本の針路と教育」	女子栄養大学	一水会
19年度	内木恵美(日赤東京支部、大森赤十字病院)	「日本赤十字の海外支援活動について」	女子栄養大学	清和会
20年度	栗原 修(江東区文化財専門委員 駒澤大学講師)	「江戸時代の社会と伝統工芸について」	新宿区立四谷中学校	清和会
21年度	和田千穂(メディアプロデューサー)	「私の職場は地球」 国境なきメディアプロデューサー	台東区立田原小学校	一水会
22年度	浦井正明(東叡山寛永寺長 鷹前台東区教育委員長)	「江戸の教育」	台東区立田原小学校	一水会
23年度	田中真人 (日本赤十字社 東京都支部事業部救護課長)	赤十字減災セミナー 首都直下地震に備えて	台東区立上野中学校	清和会
24年度	加藤昌男(NHK放送研究センター)	「先生たちに發揮してほしいことばの力」	台東区立上野中学校	清和会
25年度	山脇愛理(NGO「アフリカ象の涙」代表)	「アフリカ象の涙」 I アフリカ社会・学校教育	渋谷区立加計塚小学校	一水会
26年度	大塚義治(日本赤十字社 副社長)	「一般教養としての赤十字 ～その窓から見た世界と社会～」	豊島区立仰高小学校	一水会
27年度	関ノ戸竜太(元 小結 岩木山) (境川部屋 関ノ戸親方)	「相撲道と力士の育成」	Y R イベントホール	清和会
28年度	廣瀬駒雄 (オーエム通商アクト株式会社代表取締役 元オリックス株式会社専務取締役)	「日本の現状と課題 —教育界に望むもの—」	Y R イベントホール	清和会
29年度	三宅 正純(JAXA調査国際部長)	「日本の宇宙技術開発の現状と 社会課題解決への貢献」	Y R イベントホール	一水会
30年度	藤嶋 昭(東京理科大学名誉教授) (光触媒国際研究センター所長)	「科学も 感動から！」	Y R イベントホール	一水会
元年度	富田英雄(富田製作所代表取締役社長)	「東京スカイツリー六・三・四に挑む」 ～鉄に秘められた技術力～	Y R イベントホール	清和会
2年度	中止			
3年度	今井重夫(元東京都碧水会理事長)	「碧水会に期待する」	豊島区立目白小学校	一水会
4年度	大畠崇央 (元ウォルトディズニーシニアプロデューサー)	「働き方改革」 ～あなたが作るチームの魔法～	千代田区立昌平小学校	一水会
5年度	奥野玉紀(日本ガラパゴスの会 事務局長)	「世界遺産ガラパゴスに学ぶ 持続可能な社会づくりかた」	台東区立 御徒町台東中学校	清和会
6年度	教授 岡島 義(東京家政大学)	「睡眠が拓く、子供の未来」	台東区立御徒町 台東中学校	清和会
7年度	勅使川原 郁恵 冬季オリンピック3大会連続出場 ショートトラックスピードスケート選手	「夢を実現する子どもたち」	Y R イベントホール	一水会

# 令和7年度 碧水会創立30周年記念誌

## 碧水会の新たな門出に

碧水会理事長・東京都伯水会会長 石川清一郎



碧水会の会則第1条に「本会は、碧水会と称し、東京都教育界の振興に寄与し、会員相互の連携親睦と研鑽を目的とする。」と、本会の(名称及び目的)が明記されています。本会の一員として、創立30周年という記念すべき節目に立ち会う偶然に、ふと、高校時代の教師の言葉が蘇ります。

『過去を知り、理解しない者は、未来を語ることはできない。』

本会を構成している四団体が誕生したのは、それぞれ、東京都一水会が昭和43年、東京都中学校清和会が昭和47年、東京都伯水会が昭和58年、東京都清友会が昭和63年です。各団体はそれぞれに東京都の教育に貢献していましたが、志を同じくする四団体が更に連携協力することにより、より一層強力なものになるという当時の清友会会長の柏木末志氏の提唱により、平成2年11月1日、本会

発足の産声が上げられました。本会が正式に発会したのが平成7年11月18日です。本会発足の第一声から正式な発表に至るまでの先人の方々のご苦勞が偲ばれます。会の名称から始まり、四団体が構成するという会の特性上での運営はどのようにしていくのか等々、議論が重ねられていく中で会則が作られてきた経緯があります。平成7年度から本会が正式に動き出して以来、本会を生み出した先人の方々の思いや理念が脈々と受け繋がれて今日に至っています。本会を構成する四団体の私たちは創立30年の時を経た今、会則に現れている先人の方々の理念や本会の存在意義を再確認することが大切だと思います。

本会の特性として、年1回に絞った研修講演会事業の開催があります。本会の創立以来30年間、その時代、その時代に様々な分野で活躍されている方々を講師として招聘して実施されてきました。私も本会と関わらせていただいてから毎年受講してきました。教育界以外のことには疎い私は、その度に目から鱗のお話を伺い、自分の視野が広がっていく充実感とともに教育とは何か、を改めて考えさせられる機会となったことが懐かしく思い起こされます。

AIの急速な進化に伴う社会の急激な変化、予測困難で不確実な時代を迎えている現在、未来社会に生きる目の前の子供たちに、どのような教育をしていけば良いのか。本会が提供する年1回の研修講演会は、四団体の皆が考える1つのきっかけになっていることと思います。

本会創立30周年の節目に、本会を創立された先人の方々の理念はそのままに社会や教育界の変化に柔軟に対応しながら新たな第一歩を踏み出す「碧水会」でありたいと考えています。



北区教育委員会教育長 福田 晴一 様より、記念式典でご来賓のご挨拶をいただきました。



一般社団法人 東京学芸大学 同窓会副理事長 渡辺 裕之 様より、記念式典でご来賓のご挨拶をいただきました。

# Learn from The Past Live in The Present Plan for The Future

東京都清友会会長 村上 みな子

碧水会創立30周年、心よりお祝いを申し上げます。

本会は、平成7年に東京都の教育の振興と会員相互の連携・親睦・研鑽を図ることを目的として創設され、今日までその活動は脈々と受け継がれて参りました。その組織体制は、一水会・伯水会・清和会・清友会の4団体協働組織であり、当初は清明会という指導主事部もあったと伺っております。このように本会は「行政と学校の連携」とともに「異校種間連携」による頼もしい組織であり、かつて清和会が「政策の清和」「研修の清和」「行動の清和」と明快な活動方針を掲げていた所以はここにあったのではないかと思います。また、本会が機動力ある組織として活動を継続できた要因は、「目的の共有」「使命感と貢献意欲」「円滑なコミュニケーション」であり、会員相互の信頼関係のもとに情報共有や意見交換などが積極的に行われ、今日まで活動実績をあげて参りました。

さて、表題に示したように、私たちは今30周年を契機に本会の軌跡をたどり、その時代時代に活躍されてきた先輩方々の想いや行動に学びながら、予測困難なVUCAの時代を生きています。そのような中、教育界では次期学習指導要領改訂の準備が進み、学校は、評価の抜本的改革やIT教育など新しい学びの方向性をはじめ様々な課題を突きつけられるでしょう。このような時期だからこそ、本会は4団体の連携協力のもとに力を発揮し、学校を応援・支援する組織でなければなりません。今後も碧水会の名のごとく、清き流れが淀むことのないように、決意新たに本会のさらなる充実・発展に尽力して参ります。

## 組織を活性化させる熱意

東京都中学校清和会会長 平岡 栄一

碧水会創立30周年、誠におめでとうございます。東京都中学校清和会（以下、清和会）を代表し、心よりお祝い申し上げます。

30年という節目を迎えた碧水会が、異なる立場や専門分野で活躍する方々の知と経験を結集し、対話と実践を通して教育の発展に寄与してきたことに、深い敬意を表します。その歩みは、変化の激しい時代にあっても、児童生徒一人一人のかけがえのない良さを引き出し、自ら考え、判断し、行動する力を育むという教育の本質を絶えず希求してきた、時間と工夫、そして熱意の堆積です。

さて、清和会の活動は、教育基本法に示された教育の目的及び理念を踏まえ、管理職、管理職候補者、若手を含むすべての職層の資質・能力・実践力の向上と充実を目指しています。

今年度のキーワードは「人材育成」と「広域ネットワーク」です。

「人材育成」においては、学校経営や教育実践、様々な教育課題への対応を共有し対話することを通して、誰もが幸せになる価値ある持続的発展を遂げる学校づくりを進めること、困難な課題にも主体的・柔軟・粘り強く対応し、組織人として、また一個人として充実した人生を協働により実現することを目指しています。

「広域ネットワーク」においては、東京都中学校長会をはじめ、東京都一水会、伯水会、清友会との連携を深め、国内外の多様なフィールドの方々と対話を重ね、異なる視点や文化を融合させながら新たな価値を創出し、「組織を活性化させる熱意」を育てています。

この2年間、碧水会理事として、また創立30周年記念行事に参加させていただく中で、VUCAの時代において、またSociety4.0から5.0へと移行しつつある時代だからこそ、対面で語り合い、先人・先輩方の知に学び、自らの実践を伝え助言をいただくことの重要性を改めて銘記しました。

今後も皆様とともに、誰一人取り残さない価値ある教育の実現に向けて学び続けることをお誓いし、祝辞といたします。

## 碧水会30周年おめでとうございます

東京都一水会会長 伊藤 栄司

碧水会は、平成7年に一水会・伯水会・清和会・清友会の4団体が連携し、東京都の教育振興に寄与することを目的として誕生しました。発足までには、会則や運営方法を定めるために幾度も会議を重ね、多くの方々の尽力により組織が整えられました。「碧水会」の名前は、各団体の名称に由来し、清らかな水の流れのように連携と親睦を深める願いが込められています。

また、設立以来、「東京都教育の振興に寄与するとともに、会員相互の連携・親睦・研鑽を図る」という目的を掲げ、活動を続けてきました。その中心となる事業が毎年開催される講演会です。これまでに28回の講演会を実施し、時代の要請に応じたテーマを取り上げ、教育現場に必要な知見を提供してきました。講演会は、学校現場の課題に対応するための情報交換の場であると同時に、会員相互の絆を深める貴重な機会となっています。

碧水会の歩みは、単なる情報共有にとどまらず、管理職育成という重要な課題に取り組んできた歴史でもあります。日ごろ接する機会が少ない小学校と中学校の管理職・管理職OBが一堂に会し、互いの経験を語り合いながら、東京都の教育の質の向上に向けて真摯に議論を重ねてきました。こうした校種を超えた連携は、教育の一体性を高め、未来を担うリーダーの育成に大きく貢献しています。

今後、教育を取り巻く環境はさらに変化し続けます。理想の教育を実現するためには、幼稚園・こども園を含めた小学校、中学校の連携が不可欠です。また、各校種のOBを含め、それぞれの専門性を活かし、豊かなコミュニケーションを通じて「連携・親睦・研鑽」の結晶を築き上げることが求められます。これまでの30年の歩みを礎に、次の時代に向けてさらなる発展を期待しています。

東京都一水会では、これまで以上に清和会、清友会、伯水会の皆様と連携し、東京都の教育の質の向上に取り組んでいきます。各団体の連携を図る上で、碧水会の役割は大変重要です。会員の皆様の方で、これからも碧水会が末永く続くようご協力をお願いいたします。

## 記念講演 演題

## 夢を実現する子どもたち

講師 勅使川原 郁恵氏



日本ショートトラックスピードスケート界の草分けのひとり。中学2年で全日本選手権総合優勝、高校1年から5連覇。世界ジュニア選手権で日本人として唯一の総合優勝。1998長野、2002ソルトレークシティ、2006トリノと3大会連続でオリンピックに出場し、個人・リレーで入賞。引退後は解説者・リポーターをはじめ、食・運動・睡眠など、健康的なライフスタイルを叶えるための資格を「27」取得。その資格を活かしヘルスケアスペシャリストとして、一般社団法人ナチュラルボディバランス協会を設立。現在はJOCで選手支援、一般社団法人あそび庁副長官、一般社団法人コドモジブンケンキュウなど、次世代の子どもたちの教育に寄与する取り組みを続けている。

### 1. オリンピックと私の原体験

3歳でスケートを始め、『オリンピック』を夢の象徴として追い続けてきました。3つのオリンピックに連続出場できたものの、結果は4位・5位・6位。手が届くのに届かないメダルの悔しさを抱えながらも、悔いなく引退できました。今は、後輩たちがその一歩を越えてメダルに辿り着くことを願い、解説や支援の立場から伴走しています。

### 2. 子どもの夢を支える7つの法則

これまでの競技人生を通じて『夢の実現』に不可欠だと実感した要点を、教育にも生かせる7項目で整理しました。

#### (1) 信頼関係の土台づくり

親子、教師と子ども、チームメイトと選手、あらゆる関係の核に『信頼』があります。私は父から意味のない叱責を受けた記憶がありません。つまりいたときも『あなたなら大丈夫、やっつこらん』と背中を押してくれました。家は、安心して帰れる場所。学校は、子どもの価値が実感できる場であるべきです。家庭と学校の連携が大切だからこそ、前向きな声かけ、メッセージの一貫性が重要です。

#### (2) 小さな成功体験の積み重ね

小1で県大会に出場し、姉二人と各部門で『三姉妹優勝』を経験しました。家に新聞記者が来て初めてインタビューを受けた嬉しさが忘れられない。成功体験は次の挑戦を呼び込みます。私は家に並ぶ『だるま』の背に手書きで目標を書き、常に見える場所へ。テレビを見ながら『今は走るべきだ』と自分を律する仕掛けにしました。教室に掲げる夢や目標。手書きの力は強く、子ども自身の内発的動機づけを高めます。

#### (3) ロールモデルの力

困難を乗り越える親の姿はロールモデルでした。父は新しいことに挑戦し続ける人。現役を終えてからも私はトライアスロンやフルマラソン、ノルディックスキーなど、未知へ踏み出すことで自分を更新しました。海外からも学びます。海外選手はオン・オフの切り替えが巧み。遠征先で他国のテーブルに座り、食事をともにし、交流を重ねて『同じ人間』と実感することで、レース本番の余計な緊張を解きました。

#### (4) 逆境で育つレジリエンス

ナショナルチーム最年少で、先輩からの逆風を受けましたが、ナショナルチーム合宿の準備など率先して動き、私生活を含め完璧な立ち振る舞いを続けた結果、先輩との関係性も良くなりました。また、父からの言葉には何度も救われました『郁恵は雑草だ。花は折れればそのままだが、雑草は踏まれても立ち上がる』が支えていた。競技中の唯一の大きけがでは片目を負傷し顔を14針縫いました。その時にも『私は本当にスケートが好きか』と自問し、続ける選択をしました。好きであること、周囲のサポートがあることが、回復の力になります。

#### (5) 承認の文化

努力している姿を見て、認めてくれる存在が一人でもいること。最後のオリンピックを目指した頃、コーチが自分とマンツーマンの時間を作ってくれ『大丈夫、オリンピックに連れていく』と言ってくれました。その言葉が自己効力感を極限まで高めてくれました。ホームルームや朝礼で子どもの努力を言語化して承認する文化は、挑戦を継続する力を育てます。

#### (6) 心身の健康と継続の力(コツコツの習慣)

諦めず続けること。私は人の2~3倍のトレーニングを自分に課しました。練習開始前に会場へ行き自主練、時間になれば合流する。地味ですが効きます。学校も一番で教室に入り、ゴミを拾い、机と椅子の列を揃え、最初に来た友達へ明るく『おはよう』。空間を整え、雰囲気明るくする行為は、自己効力感とクラス文化を育てます。帰路も走る、寄り道しない。日記を毎日つけ、『よかったこと/できなかったこと/翌朝やること』を書き、翌朝必ず実行。やめずに続けることが力になります。

#### (7) 誰のための夢かを問う視点

中2で全日本優勝。翌年のリレハンメル選考会で転倒、総合2位になり、代表は1名枠で先輩へ。14歳の私は悔し涙をこらえ、メディアの前で『4年後、見ていてください』と一言だけ宣言しました。支えてくださった方々への感謝と有言実行が私を次の4年へ向かわせ、失敗が学びに変わりました。目標は段階化が鍵です。オリンピック周期に合わせ、1年目は徹底的に体づくり、2年目は道具の最適化、3年目は結果(ランキング)を上げる、4年目は体調管理でピークへ、という設計で過ごしました。

### 3. 健康の三本柱

運動・食事・睡眠のバランスは、学びと挑戦の土台です。『五輪の5色』を食卓に並べるイメージで、赤・青・黄・黒・緑、足りない色があれば補うようにする。そのような分かりやすい基準を決め栄養バランスを整えています。引退後は健康に関する資格を27取得し、運動・栄養・休養の大切さを伝えています。

### 4. 誰のための夢か

夢は自分のためであると同時に、誰かのためへと広がると力が湧きます。家族、コーチ、栄養面で支えてくれた人、切磋琢磨したライバル、競技を愛する仲間、そして競技そのもの。みんなのために頑張ると成果が社会に喜びを広げます。私はショートトラックをもっと知ってもらいたいという願いを背負い、子どもたちのロールモデルになりたいと今も活動しています。

### 5. まとめ：未来を開く教育への期待

すべての子どもが夢を持ち、挑戦できる環境を整えること——それが私たち大人の責任です。健康な心身、継続的な努力、承認の文化、信頼の関係、失敗から学ぶ設計、ロールモデル、そして『誰かのため』という視点。これらが組み合わせると、夢は現実へと橋を架けます。